感染状況と医療提供体制の状況について

資料１－５

新規陽性者の発生動向・医療提供体制の状況

１　大阪府の感染状況

（１）感染状況

○　新規陽性者数は、１月15日以降、連日過去最多。19日には6,101人、20日も同水準で発生。
12月中旬以降から、過去類を見ない速度での感染急拡大が継続。
各年代で陽性者が急増しており、18歳以下新規陽性者数が全陽性者に占める割合もやや増加。

○　オミクロン株へはほぼ置き換わっているものと考えられるが、**デルタ株患者も依然、確認**。デルタ株は重篤度が高いことから、今後も警戒が必要。

○　**陽性率は、連日増加しており、20日時点で19.8%**（１週間平均）。直近１週間では、自費検査が約３％、無料検査が約５％と高く、**市中に感染がまん延。**

○　**直近１週間における夜の街関係者及び滞在者数は、過去の波で最多の669人。**
20･30代は他の年代層より、イベントや人との集まり、飲食のエピソードがある陽性者が多く、40･50代も飲食のエピソードがある陽性者が多い。
クラスターとしては、**高齢者施設関連と飲食･イベント等関連クラスターが全クラスターに占める割合が増加**。

○　１月１日～９日までに判明した**新規陽性者のうち、２回接種済の者が約５割**。オミクロン株への感染は、ワクチン２回接種による発症予防効果が著しく低下することが示されており、海外の研究結果から、３回目接種による発症予防効果等の回復が期待。

２　入院･療養状況等

○　20日時点で全体病床使用率が35.8%となり、**まん延防止等重点措置適用を国に要請する目安を超過。**
軽症中等症入院患者数や宿泊療養者数、自宅療養者数が急増している。
府内の一般救急患者の搬送困難事案の件数が直近で日々、増加。

○　オミクロン株はデルタ株に比べ、重症化リスクが低下している可能性が示唆されているが、第六波においても、入院調整時において、**酸素投与を要する中等症Ⅱの患者や重症患者が一定数確認。**

○　重症者数については、現時点では、第五波と比べて増加が抑えられており、**重症化率は、第五波が1.0%のところ、第六波は0.05%。**
死亡率についても、第五波が0.4%のところ、第六波は0.03%（重症化率、死亡率ともに、今後、新規陽性者数の推移等により変動）。

○　１月７日に入院対象を中等症以上や重症化リスクが高く症状のある方とし、入院率は4.1%（20日時点）。

○　**１月23日もしくは24日に全体病床使用率が「非常事態」（赤信号点灯）の目安に到達する見込み。**

感染状況と医療提供体制の状況について

今後の対応方針について

○ 12月中旬以降、過去類を見ない速度での感染急拡大が続いており、**市中に感染がまん延。**
今後も、更なる拡大又は高水準で推移していく可能性が高い。
この状況から、**自宅・宿泊療養者数や入院による治療を必要とする人が急激に増え、軽症中等症の医療・療養体制がひっ迫する可能性**があり、**数日内に非常事態（赤信号点灯）の目安を満たす見込み。**
一般救急患者搬送困難事案が急増しており、コロナ医療と一般医療の共存が困難な事態が近づきつつある。

○ 沖縄県やアメリカなど他国では、医療従事者やエッセンシャルワーカーが感染・濃厚接触者となることで、**必要な医療や福祉、行政サービス等、社会機能維持が困難となる場面も見られている。**
現状より強い措置により現在の感染急拡大を食い止め、医療のひっ迫を防ぐとともに、社会機能を維持することが必要。

○ 年末年始から続く感染急拡大は、親族の集まりや忘年会、新年会、初詣や成人式前後の集まりなど、**普段接する機会がない人が複数集まり、三密のいずれかに該当する場合や適切な感染予防対策が講じられなかったことを背景に起きた可能性**がある。
オミクロン株の感染経路は主に飛沫感染・接触感染であり、デルタ株等と同様に、**換気が不十分な屋内や飲食の機会等で起こっており、基本的な感染対策が有効とされている**（国立感染症研究所）。

⇒今後も、**府民等に徹底した感染予防対策（マスク着用、手洗い、三密の回避など）の実践を要請する**とともに、**感染リスクが高まる「５つの場面」（飲酒を伴う懇親会等、大人数や長時間におよぶ飲食など）を徹底して避けることが必要。**

⇒府においては、**重症化リスクのある患者を早期に発見し、治療につなげることを最優先**とし、**保健所業務の重点化**をはじめ、**自宅待機SOSの運用や医療機関の公表等、保健所を介さずに医療にアクセスできる体制を引き続き整備**していくとともに、**ワクチンの追加接種を推進**していく。